

学長のコラム

フレイルリハビリプログラムが96歳の友人との面会を可能に

49年前の1969年の夏（アポロ11号の月着陸の年）、博士課程1年（24才）の私は、橋の設計のアルバイトで貯めたお金で、橋と大学を訪ねて北米大陸を一周する3か月の貧乏一人旅（1日\$10）を実施した。ロスに上陸、北上して、カナダのバンクーバーで、日本庭園を見て回る時に、石灯籠をいぶかしげに見る米国の中年夫婦に声をかけ、石灯籠は庭を明るくするためのランタンであることを説明してあげた。ツアーが終わりバスを降りると、その二人が近づいてきて、“今晚、予定がないのであれば、一緒に食事をしたいのですが・・・”とのお誘いをいただいた。GパンとTシャツしか持たないので・・・と丁重に辞退すると、“そんなことは問題ない”といわれるので、受けることにして、約束の場所に行くと、何と二人ともGパンに着替えて、待っていてくれた。そして、シーフードレストランで、楽しい食事と団らんの時を持った。後で分かったのであるが、彼らは47歳（John）と46歳（Bea）の夫婦でミネアポリス（ミネソタ州）から旅行に来ていたのであった。その後、オハイオ州立大学における1年半の研究生活の時、彼らの日本訪問、娘と息子が米国で学生生活をした時、シカゴでの娘の結婚式などお付き合いが続いた。Beaが亡くなり、弔辞を読むために渡米したのが10年前で、それ以来の今回の面会となった。Johnも96才で、皆が彼のフレイルを心配したが、ミネアポリスからシスコ（彼の息子一家が住んでいる）まで、車いすアテンダントを付けたフライトで一人で私たちに会いに来てくれたのである。Johnとシスコに住む息子の家族（5人）と、ユージーンから私の娘の一家（5人）、日本から、私ども夫婦と息子と孫娘が集まり、計大人11人、子供4人のにぎやかで楽しいパーティが持てた。49年間のつき合いをつづる写真アルバムを作りプレゼントしたが、昔を懐かしみ、思い出話が尽きなかった。Johnは、思いのほか元気、かつ頭脳明晰で嬉しかったが、毎日、筋トレ（リハ）をして体を鍛えているという。彼は、ある老人施設に入っているが、そこには、リハ室もあり専属のPTもいるとのこと。そのPTによるJohn向けのリハビリプログラム（A4紙1枚）を見せてくれたが、そこには、Chair Stand（腕を前にまたは組んで8～12回立ち上がる）、Bicep Curls（10～12ポンドのダンベルを、座位または立って、10～20回肘を腰につけて曲げ上げ下げを繰り返し、上腕二頭筋

を鍛える）、Tricep Press（18～20ポンドの負荷で10～20回、上腕三頭筋を鍛える）、Row（40～50ポンドの負荷で肩甲骨の間を狭めるように舟漕ぎ運動を10～20回行う）の4項目が記載されていた。今回の会見が実現したのは、Johnがこのリハビリプログラムを毎日実施してきた成果であり、その意志の強さに感銘すると同時に、PTの指導と実施により、ある程度フレイルを克服できることを目の当たりに見せてくれた。・・・と同時に、49年前のふとした会話が、今や、孫まで三世代にわたるおつきあいに発展していることに、感慨が深い。本学の短期留学プログラムの参加学生とホストファミリーの間にもこのような付き合いの広がり可能性が存在していることに期待もしたい。



8月・9月・10月の主な行事予定

8/26(日)	チャレンジ熊保大！推薦入試対策講座
8/30(木)	教職員旅行（筑後吉井方面）日帰り
9/ 3(月)	前期再試験期間（～6日）
9/ 6(木)	利益相反セミナー
9/ 7(金)	大邱保健大学交換研修生7名派遣（～20日） コンケン大学交換研修生7名派遣（～20日）
9/10(月)	大学院修士論文中間発表会
9/12(水)	第1回FDセミナー
9/13(木)	教職員旅行（糸島・星野村方面）（～14日）
9/19(水)	学校法人銀杏学園 理事会
9/21(金)	認定看護師教育課程 認知症看護分野修了式 リハ合同就職説明会
9/22(土)	久しぶり逢おう会 第44回 熊本県私立大学協会親善ボウリング大会
9/25(火)	ローソン熊本保健科学大学店開店！
9/26(水)	後期授業開始（保健科学部）
9/28(金)	海外留学奨学生（学生）応募締切
10/ 1(月)	認定看護師教育課程 脳卒中リハビリテーション看護入学式
10/17(水)	動物慰霊祭

行事予定（つづき）

10/20(土)	学園祭（第42回杏祭）
10/31(水)	医学検査学科 臨地実習認定式

第3回保健科学国際シンポジウム2018 in フィリピン

7月12-13日、セントロ・エスカラー大学において、第3回保健科学国際シンポジウム(MT・Ns)が開催されました。提携校であるセントロ・エスカラー大学、大邱保健大学、コンケン大学の専門家と共に、本学から医学検査学科 正木 孝幸 教授、看護学科 荒木 善光 助教、経営戦略課 米村 英之 課長の3名が参加しました。数百名収容する大講堂には教職員や学生でほぼ満席となり、発表された17演題に対して、活発な意見が交わされました。今後も大学間での人的・知的な交流が推進され、アジア・太平洋地の発展に少しでも貢献できればと思います。（文責：看護学科 荒木 善光）



平成 30 (2018) 年度 助産別科臨地実習適格認定書授与式について

入学して、4 か月、助産学をひたすら学習し、8 月 3 日、臨地実習適格認定書授与式にて、21 名全員に認定書を授与いたしました。それに先駆けて、助産技術試験を行いました。緊張で、行動にぎこちない面も見られましたが、入学当初では見られなかった気迫を感じました。

臨地実習は、学内で学んだ理論及び技術を実践場面で自ら統合する能力を培うため肝要な学習です。宣誓では、「私たちは、これまでに得た知識・技術を最大限に生かし、助産ケアを通して深めていけるよう、主体的に学ぶ姿勢を持ち続けます。」と、声高らかに唱和していました。8 月 20 日から 11 月 26 日までの臨地実習で、誓いの言葉を胸に秘めながら、いろいろな場面で、立ち止まり、悩み、喜びなどの経験を通して、より人間力を高める学習ができることを期待しております。(文責:助産別科長 堅野 真紀子)



基礎セミナー合同発表会

7 月 11 日 (水) 3・4 限に、毎年恒例の 1 年次全学科専攻必修科目「基礎セミナー」の合同発表会が旧アリーナなど 3 会場でおこなわれた。今年は冒頭に渡邊淳子セミナーによる演劇の発表があり、学生たちの本格的な演技に観客は圧倒されたようだった。そのほか 20 のセミナーによるポスター発表、9 セミナーによる口頭発表があった。それぞれ特色ある発表で、参加者は互いに他のセミナーの発表に刺激を受け、学ぶところが多かったようだ。(文責:共通教育センター長 渡辺 雄一)



海外留学 (学生対象) 説明会

8 月 7 日 (火)、今年度の海外留学(アメリカ・イリノイ州)説明会を 2 回に分けて行い、計 81 名の学生の参加がありました。株式会社ベネッセの留学プログラムの説明に加え、前年度の留学生が「留学先で学んだこと・感じたこと」を話したり、質問に答えたり、参加者は熱心に耳を傾けていました。

留学希望者は、書類・面接の選考を経て、最大 20 名が来年 3 月 4 日から 4 週間の留学へ出発する予定です。(文責:企画課)



科研費書き方講習会

学術研究会議では、8 月 9 日 (木) 科研費申請のためのより実践的な講習会を開催しました。今年度「基盤 B」に採択された飯山先生をはじめ、複数回採択された経験を持つ 8 名の先生方に採択されるための「ツボ」を紹介して頂きました。多くの方が力説しておられたのは、適切な小区分の選び方、タイトルや最初の 1 頁の重要性、オリジナリティーのアピール、審査員にとって読みやすい書き方等でした。個別の相談会も開催する予定ですので、申請される方はどうぞ御利用下さい。(文責:学術研究部長 安部 真一)

■書き方のコツ・ヒント (各 10 分)

1	書けん！ヒ〜と言いたくなった科研費申請書作成の経験から	飯山準一 先生
2	失敗から学んだ科研費申請書の書き方	上妻行則 先生
3	科研費と歩もう	高橋 徹 先生
4	科研費申請書作成で意識した 6 つのポイント〜様々な方からのアドバイスをいただいて〜	宮本恵美 先生
5	書くのも人間、読むのも人間。	水本 豪 先生
6	科研費申請で気をつけたこと	恒松佳代子 先生
7	のさり・のされば・のさるとき・のさらんときもあるけれど・・・	竹熊千晶 先生
8	科研費申請書の書き方について (私の経験から)	安部真一 先生

■外部資金の獲得について (10 分)

外部資金獲得のキモ 飯山準一 先生

■個別相談の受付について (5 分) 学術研究部長

私の秘話ヒストリー

今回は看護学科の福永 寛恵 助教に投稿していただきました。

夏休みになって子ども達を見かける機会が増えたせいか、近頃、自分が小学生だった頃を思い出す。

先日、金魚が我が家へやってきた。夏祭りでよく見かける、あのタイプ。金魚を育てた経験はあったものの、少しでも長く生きてくれるよう、用心のために金魚の飼い方についてネットで調べてみた。すると、適切な水槽の大きさや餌やり・水替えのタイミング、ついには金魚同士の相性の見分け方など、今まで気にしたことがなかったようなことが盛りだくさんに書かれているではないか。さすが、情報化社会。

子どもの頃に育てた金魚は、卵を産み、卵も無事に孵化したので、純粋にそのことを喜んだ。しかし、何か特別な注意をしたこともなかったように思う。金魚を飼うことの奥深さを知ってようやく、あの時に大人達の助けがあったことに気づく。

時間が経ち、成長し、何かのきっかけで気づきとなる。今、学生達に対する自分の関わりも、そのように繋がっていくと嬉しいなと思った、この夏の経験だった。